

「プラナリア近況」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

冬から春にかけては水温が低く、エサもあまり食べなかったプラナリアたち。4月の始めには、長さ2～3mm程度にまで小さくなってしまい、絶滅寸前に陥っていた。しかし、エサを「サントク小石川店の高級豚レバー(100g 198円)」に変更し、水温も上がってきたことから、ここ3か月で「劇的に」成長した。



これがエサを投下した直後である。豚レバーは、あらかじめ1cm四方ぐらいにカットして、各小片を冷凍してある。最初の1～2分は凍っているのでは近づかないが、融け始めると、すぐに寄ってくる。



その後ものの数分で、豚レバーはとり囲まれて、「プラナリア球」となる。プラナリアの口は、頭ではなくお腹側(容器の底側)についている。従ってエサを抱きかかえるようにして食べるのである。



容器を移動したり、振動を与えると、瞬時に防御姿勢をとる。短い個体、小さな個体は体を縮ませる。長い個体は、「つ」の字型に変形する。水面に浮いていた(プラナリアは泳げる!)個体は、ゆっくり沈んでゆく。積極的な攻撃能力を持たないプラナリアにとっては、これらが唯一の防御方法なのだろう。



よく観察すると、長細い個体(約40mm)に「くびれ」があるものが見られた。これは分裂寸前のものである。プラナリアは、切断再生実験の教材として有名だが、このように自分でも分裂する。現在約60匹。もうすぐ、3年生全員に配れそうだ。